

アフリカ旅日記 ― 喜望峰を訪れて ―

佐藤 幸子

旅は楽しく安全なものでなければならない。危険な思い、辛い思いまでして旅をすることはないというのが、私の堅いスタンスである。

これまで旅してきたところは、先ずアメリカである。まだ、安全な時代であった。そのあと、ヨーロッパ美術旅行、ユネスコ視察のため文部省派遣のスリランカ、タイ、日本語教師としてペルー、恩師のかばん持ちで学会のため中国、日本大使の招待を受けてチェコ訪問、英文学研究のためイギリス、そして、日豪友好使節団の一員としてオーストラリア訪問、ついでにニュージーランドなどである。NZ は留学を含めて 10 回位は行っている。観光旅行はほとんどないが、いずれも安全で楽しい旅である。そういう私が何を血迷ったのか、アフリカなどに行ってしまった。まさか私がアフリカなどという恐ろしい？ 国に行くことが出来るなんて夢にも思わないことであつた。

数年前、カンタベリー大学 (NZ クライストチャーチ) で日本文化を教えた時、山田領事夫妻と知り合った。素晴らしい日本の浮世絵が飾られたレストランで美味しいフランス料理をご馳走になった。その山田領事がケープタウンの日本領事に転勤された。

そして、ある日、忽然と「アフリカに行こう」と私は思った。決して危険な所へは旅しない主義の私が、今この時を逃したら、一生アフリカを訪れることなど有り得ないと分かっていた。気取らない山田夫人とは特に気があって、この方のところなら安心して、お世話になれると思った。しかし、当然ホテルに滞在するものと思いついでいた。ところが、ホテルは非常に高いし、お部屋があるので、是非自宅に泊まって欲しいといわれ、しぶしぶ(?) そうすることにした。私は個人のお宅に泊まることは決してない。ホテルが一番居心地がいいのだ。

あー、しかし、しかし、私の浅はかなことよ。領事公邸というのはそんなちゃんなものではなかった！ 私専用の部屋は無論のこと、バス、トイレにいたるまで私専用のものであつた。6 畳ほどもある壁一面鏡張りの大きなバスルームを私一人で使わせていただいた。

こうして、私は 2006 年から 7 年にかけて楽しい年末年始をアフリカで過ごすことができた。どなたの人生もそれぞれに難しい問題をかかえているものだと思うが、陽気な私の人生にもなかなか大変な部分があるのだけれど、思いがけず幸せな日々を持てたことをどんなに有難く思ったか知れない。

暮れの 23 日に日本を発って、24 日に香港に着いた。綺麗で大きい空港で高級なものを買っているらしいが、特に買物もない。私は書類を取り出し、仕事を始めた。私にとってはこんな時間が一番楽しいのだ。もうショッピングに魅力を感じたりはしない。

香港で飛行機に乗ると、私の大きなカートをお隣の男性が上の棚に上げてくれた。若い奥様は東京の英国大使館に勤めているとのこと (欧米の男性は妻がそばにいても、必要な時は女性に親切にしてくれるが、日本の男性はそれはいけないことと思っているらしい)。

彼はインペリアル カレッジを出ていて、技術屋らしい。奥様は事務の仕事―アカウンティング

グーといていた。いろいろ話している内に北海道にスキーに行きたいと言っていた。別れる時、名刺を交換した。彼らはクリスマスを母親と過ごすためにヨハネスブルグに帰るところだった。

私もヨハネスブルグでおりて、荷物を取る所を数人の係員に聞いてやっとその場所を見つける。山田氏が言うには、空港には荷物を持ってあげると言って法外なチップを要求したりする人もいるので、決してそういうことに応じてはならないとのこと。係官の制服を着た人に物を尋ねたらいいでしょうと言うと、係官のような制服を着ていてもそれはニセの制服の場合がある、と言われたのには本当に驚いた。クリスマスが近づくと、そういうことをする人が空港にはうじゃうじゃいるそうだ。ペルーの空港に似ていると思ったが、でも、ペルーではニセの制服を着ることまではしない。

10分以上待つてやっと私の荷物も出てきた。それから2人の女性の係官が混雑した中をエレベーターのところまで連れて行ってくれ、背の低い男の人に私を引き渡した。彼は30メートル以上も歩いて次の建物まで連れて行ってくれた。何をあげたらいいのかしらと考えていると、「ギブミーチップ」と言った。まだ、アフリカのお金（1ランド=16.7円）は持っていなかった。香港でビールを飲んだ時、千円札を渡して受けとったおつりの香港ドルと江戸時代の美女の絵の描かれた小さい団扇をあげた。そこのデスクでボーディングパスを貰い、中に入る。

飛行機の中ではお隣にアフリカの女性が座っていた。生まれて初めて見る（？）アフリカの女性である。いろいろ話し掛けてみる。真面目そうな感じの女性で、会社に勤めている（アカウントィング）、独身で姪と暮しているとのこと。生まれて初めてアフリカの女性と話をしたと言うと、おとなしい感じのその女性は静かに頷いていた。

はっと気が付くと、私は山田さんのご自宅の住所も電話番号も家においてきた。もし彼らが空港にいらしていなかったらどうなるだろうと愕然とした。土曜なので領事館も閉まっているだろう。言葉も通じないし…。有難いことに彼らはきていた。本当に懐かしく嬉しかった。空港の近くにはスラム街があり、国民の4割が貧民層とのこと。町が近づくと、まさにその名の通りの姿の「テーブルマウンテン」が見えてくる。そこには今でも山賊が出るそうだ。

夕食は私の持っていった鯨蕎麦を食べた。飛行機の中で一晩過ごしたので、10時ころ早々に寝る。まさに、我を忘れてぐっすり眠った。7時に朝食。これからこの家での朝食は毎朝7時である。

12月25日

ご主人は飛行場に甥の飛展さん（筑波大学4年生）とカラボラご夫妻を迎えにいった。10時に彼らは到着。こうして私のアフリカでの楽しいクリスマス、お正月が始まった。夫人の甥のこの青年は真に良い青年で、二週間以上我々は同じ屋根の下で楽しい日々を送ることになるのである。知情意全てにバランスの取れた好青年であった。

しばらく歓談の後、みんなで植物園に行く。植物園でランチをとった後、海（ハウトベイ）に行く。24日だから、大変な混雑ぶりだった。ご主人は昨年その埠頭でお金を取られたとのこと、やはりクリスマスで、「お金に困っているんだ」と言ったとのこと、大笑いであった。脅かすよりはましだろうという話になる。

カラボラ夫人はロンドン大学で勉強を終え、丁度日本に帰ろうとした時、やはりロンドン大学に来ていたアフリカ人のご主人と知り合い、「つかまって（？）」しまったとのこと。それからウン十年、今日帰ろう、明日帰ろうと思いつつ、日が経ってしまったとのこと。お話を聞きながら、

こういう人生はどんな人生なのだろう、私のような単純な生き方しか出来ない人間には到底想像も出来ない人生のような気がした。

1994年、29年間幽閉されていたマンデラが開放されて、初代大統領になり、副大統領はウベキ。黒人政権になって民主憲法が発令された。黒人支援策（ブラック エコノミック エンパワーメント）や黒人優遇策（アフーマテブ アクション）が取られ、黒人の地位は急速に上がった。

マンデラは国内にとどまって戦い、100人以上の同士と武力闘争もしたので人気があるが、ウベキは外国の大学を出た金持であり、国外に亡命したのであまり人気はないが、2代目大統領になった。大統領は2期10年で終わりである。国会はケープタウン（南アで一番最初に出来た町でマザータウンといわれる）にあり、内閣は首都のプレトリアにある。場所が別なので、不便とのこと。

南アフリカの人口は4,500万人で、白人は429万人、カラードが399万、黒人は3,540万人、である。西ケープ州の人口は450万人（白人83万、カラード240万、黒人120万）である。ケープタウンは300万。（白人20%、カラード40%、黒人40%）しかし、9つの州の内、西ケープ州は特別で、他は圧倒的に黒人が多い。

カラードは店員、スーパーのレジ、大工、電気修理など技術を持っていて、中小企業や小さい個人企業などで働いている。床掃除をしているのは黒人であるが、長い植民地生活が続き、勤勉さが失われている。道端で観光客に新聞、絵、など、市場では食べ物を売る（彼らはカラードと違って、先祖がはっきりしているとのこと）。また、農業労働者（大農場で葡萄積み）が多い。

公用語は英語、アフリカンス、各民族の言葉の3種類。学生はアフーマテブ アクションのお蔭で黒人の枠が大きいので、黒人のエリートがどんどん育っている。中間地帯もあるが、ほとんどは仕事場は同じであるが、居住地が別々で、お互いに混じり合わないのである。

世界で一番最初に心臓手術をしたクリスチャン・バーナード博士の出たケープタウン大学付属病院はレベルが高く、ここの政治家、富裕層はこの病院かヨーロッパの病院に行く。バーナード博士を記念するクリスチャン・バーナード病院がある。

石油以外はあらゆる鉱石、金属（ダイヤ、プラチナ）が採れ、プラチナは日本への輸出が第一位である。日本は明治の時イギリスの車を入れたので、右ハンドルである。南アフリカの金持はドイツの高級車BMWやベンツに乗るが、この国もイギリス系で右ハンドルだから、ここで生産された右ハンドルのBMWやベンツは日本に輸出され、輸出量は2位である（ヨーロッパの車は本来左ハンドル）。

これまではカラード（いろいろミックス）が社会階層は二番目であったが、最近是一部黒人が逆転しているので、おもしろくないかも知れないとは、日本人の弁。黒人が政権をとったので、政治家の中には黒人が少しいるが、インテリの中にも黒人が出てきている。また、アフーマテブ アクションの故に黒人を登用しなければならないが、採用するだけでなく、役員にも一部入れなければならない。

仲間で支え合って暮すので、一族の中の誰かが働くし、気候も良いので餓死はしない。政府は技術教育を促進したいが、長年の植民地生活のせいで、働く意欲が薄い。チャイルドレバラーと言って、小学生の子供を退学させて、働かせたりすることがある。

貧富の差はひどい。白人はプール付きの凄い豪邸に住んでいる。車で道路を走っていると、陸橋に透明なカバーがかけられているのを見る。それはあまりにも貧富の差が激しいので、時に黒人が面白くなくて橋から石などを投げたりするので、危険だからだそうだ。

白人の家は非常に大きく、塙で囲まれており、必ず警備員がいて家人が出入りする時は門の鍵を開けてくれる。門のところ小さい家、つまり事務所があって、8時間三交代で常に詰めている。大手警備会社より派遣され、例えば、冬にはストーブを置くとか夏には扇風機を置くとか、契約により待遇が決まっている。

我々が到着した時、守衛がいなく、「こんなこと今までなかったんですが」と領事は言って、「クリスマスが近づくと、こちらの男性は家族へのプレゼントのことなどで、頭がぼーっとしてくる」のだそうだ。勿論、彼はすぐ首になった。

この家はキッチンをはじめとして、非常に変わったデザインの家である。プロの建築デザイナーも「この家を作った人は相当変わっていますね」と言ったそうだ。夫人が来た時はあちこち壊れて、幽霊屋敷みたいで、修繕に6ヶ月かかったそうだ。しかし、庭は広く、美しい芝生では太ったホロホロ鳥が走りまわっていた（数ヶ月後、花巻空港でホロホロ鳥の親子どんぶりとやきとりを見た時はおどろいた）。

プールは便利なものかも知れないが、どこの国でも大抵は外にあるので、枯葉やゴミで汚れていて、泳ぐ気にならない。ところが、アフリカの家でのプールは機械で自動的に清掃されるので、いつも清潔である。装置は冬は6-8時間、夏は8-10時間、動く。藻が発生したことがあったが、プールドクターがきて一日で綺麗にしてくれたとのこと。多くの国のことを知っている山田氏もこの装置はニューヨークにも無いと言われた。

銀行のシステムも日本より進んでいる。銀行で自分の口座からお金の出し入れがあった時、居間の電話や携帯が鳴るそうだ。

オストリッチファームがあり、国内におけると同様に輸出産業にもなっている。レストランではポークやビーフと共にメニューに載っている。その肉はさっぱりして、コレステロールフリーであるが、あまり良い味とは言い難いそうだ。その皮で作られた財布やバッグは非常に高価である。

スーパーの品揃えは小樽の生協やスーパーより見事である。例えば、野菜などは3種類の形で売られている。もとの形のまま、ある程度カットしたもの、皿にのせるばかりに綺麗に仕上げたものと3種類の形で売られている。

金持の白人が長い間に次第に洗練された生活様式を整えてきたことが察せられるのだ。

2010年のワールドカップ（サッカー）に向けて道路、スタジアム、ホテルの整備に力を入れようとしている。経済を成長させて、雇用を増やそうとしているのだ。警察力を強化するので、泥棒は減るだろう。今は国をあげてこの話でもちきりである。ある時は競技場を作るセメントはあるかと騒ぎ、次の日の新聞には大丈夫と出るという具合である。ワールドカップまでに、スラム街をなくするため、今、沢山のアパートを建設中である。新築のアパートの家賃は6,000円とのこと。

日本のブラジル移民船がケープタウンで給油した時お世話になったので、そのお礼に日本政府は石灯籠を贈り、それは今カンパニー（東インド会社）ガーデンにある。喜望峰の近くではマグロを取る船が100隻ほどもいるそうだ。

領事夫人は庭師であるハウスボーイのことで大変な苦勞をされたそうだ。ガラス張りのこの家は隠れようが(?)なく、いつも見張られているようで、その上、無断で休まれたり、散々な目にあってきたそうだ。しかし、簡単に解雇するわけにいかないのだ。日本よりはるかに労働者の立場は守られている。このハウスボーイのことで、夫婦喧嘩(?)が絶えなく、離婚の危機とまでは言わないまでも、年中頭を悩ましたとのこと。「思い出ただけでも涙が出ます」とのこと。

そこで、「業務上の理由により貴方の仕事を必要としなくなりました」として、やっと解決をみたそうだ。つまり、もっと庭を大々的に修理するので、別の大きな会社から二人を雇うことにしたということにしたそうだ。実際、別の会社の人に頼んだら、月に2回、5、6人でやって来て、あつという間に綺麗にするとのこと、これまでは月曜から金曜まで8時から5時くらい(実際は2時には帰る)、そしてその上、彼のために沢山の食料を買って与えなければならないのだ。アパートヘイトの反動で労働者は素晴らしく保護されているとのこと、どんな怠け者でもめったなことでは首に出来ない。

ハウスガール(お手伝い)も待遇がよくて、キッチンのすぐそばに別棟の小さい家を一軒建ててある。「私達より良いベッドカバーを使っています」と夫人が笑っていつていたが、次々くる外交官がいろいろなものを置いていくのである。

彼らに与えなければならないものは、毎週、鶏1羽、パン2本、牛乳3リットル、野菜はキャベツ(月に3個くらい)やたまねぎ(一袋位)など、彼らが欲しいものを買ってきて与えなければならない。また、米、砂糖、塩、紅茶、バター、ジャムなどは要求するだけ、1年に1回制服を与えなければならない。夜、パーティーがある時は、昼間、休ませなければならない。辞める時は退職金(一ヵ月分)を払う。インド人は敵しいので、インド人に雇われたメイドを雇うと良いそうだ。つくづく労働者は日本人より守られていると思った。

12月26日

9時半出発、カレドン カジノ&スパーに行く。ランチはクリスマスなので店はどこも閉まっていた。ケンタッキーフライドチキンで買ったランチをホエイルウオッチングで有名なところで、海を見ながらいただく。ビールを買いにウルワースに行くが、なんとホリデイとサンデイ、サタデイの5時以降は売らないとアルコールのケースのガラスに貼ってある。一番必要な時、人々が一番欲しい時に売らないなんて! 結局、人々はそれに備えて買いだめをするだろうから同じことだと笑う。歌舞伎座ではお酒は売るが、名古屋の御園座では売らないようなものである。自己規制がきく所ではルールは緩やかなのだ。回り道をしたりしながら、4時ころホテルに到着。

外国に行く時、決して忘れないスリッパを国内(?)旅行なので、持参するのを忘れてがっかり。どうしようかと悩んだ挙句、売っていないだろうと覚悟しながら売店に行くと、あーなんとということでしょう! あったのです! 白いタオルのガウンとお揃いの大きなスリッパが! しかも、足指のカバーの上には日本語の「神」という文字が刺繍されてあるではありませんか! 参った、参ったというところである。私のようにスリッパがないと生きていけない(?)人間もいれば、山田氏のように西洋人と同じ感覚で、室内でも靴のままで平気な人間もいると知った時は驚いた。

取りあえず、水着をもって裏の温泉をめざすが、ローマ時代の浴場のような雰囲気漂わす、緩やかな傾斜地のあちこちに、小さなプール、大きなプールがあるが、どれも水が汚く濁ってゴ

ミが浮いている。熱かったり、冷たかったり、帯に短し、襷に長しである。結局、ゴボゴボ泡の吹き出しているところと大きなプールにちょっと入ったりで、諦める。前者の場合は下の石がヌルヌルで滑って立ってられない。領事夫人溺死なんてことになったら、国際問題ですものねと大笑いをして、早々に引き揚げる。7時頃みんなでレストランに行き食事。デザートは真っ黒いプディングなどは本当に美味しかった。夕食後、カジノに行くが、私は間もなくお部屋に戻って、水着を洗ったり、お風呂に入ったりする。翌朝、皆さんは7時、私は8時に食事。お昼はウォーターフロントの中華料理店に行く。

12月28日

午前中は日本の友人に手紙を書く。真に気持の良いひと時であった。午後からは夫人、甥、私の3人でスーパーに買物に行く。スーパーでは女の店員たちがタカちゃんの周りにわっと寄ってきて、大騒ぎである。可愛いと興奮している。名は何というのかと私に聞くので「タカヒロ」と言う。しかし、なかなか言えなく、何回も言ってから、一人がやっと「タカヒロ」と言った。私が「ザツライト」と言うと彼女らはいっせいに笑った。彼女らはジロジロと彼を見た。彼は当惑したように、恥かしそうな、照れたような表情を見せた。すると、それが可愛らしく見えるらしく、彼が目をパチパチさせるたびに、彼女達はドッと笑った。確かに彼は品の良いハンサムな青年で、それだけでなく可愛らしい。どこことなく甘い雰囲気もある。しかし、夫人の言によれば、日本ではグサイ彼の兄の方がもてて、彼はあまりもてないそうだ。品があるので、近づきにくいのかも知れない。

帰りは素晴らしいホテルでお茶をのむ。その周囲の庭には紫陽花が咲き乱れ、裏の散歩道にはレンガなどの石できちんと舗装された可愛い小道であった。中にはアンティークの家具や瀬戸物が並べられ、品の良い雰囲気だった。

その夜みんなでドイツ料理を食べに行った。客の誰かの誕生日らしく、歌手が小さなマイクを口元に取りつけて歌い、客も一緒に合唱していた。

そのあとネオンサイン煌めくウォーターフロントを領事の「僕の後をついてきて下さい」という言葉に従って、みんな固まってあとに続く。この間、誰かがみんなのいるところでお金を要求されたとのこと。だから人が沢山いるからといって安全なわけではないのだ。

それにしても、このウォーターフロントの美しさ、壮大さは世界一だろうと思う。とても回りきれないほど多彩なショッピングアーケードが続いている。ニューヨークにも、パリにも、ロンドンにもこれほど美しいものはないと思った。日本からは少し遠いが、是非行って欲しい。ヨーロッパ人は年間150万人も訪れるそうだが、日本人は数万人しか、行かないそうだ。

12月29日

11時ころ皆で車で「オリンピックカフェ」に行く。途中、それは美しい海を下に見ながら、道を登っていく。「小さくて、汚くて、美味しい店」とのこと。12時までブレイクファースト、12時からランチになるとのこと。人で一杯だった。少し時間があるので、アンティークの店に行く。絵葉書が3ランド、これまでで一番安い。探していた手ごろな鏡が75ランドであった。ビールの缶(CASTLE LAGER)を鏡の周りに使った、がっかりしているが、ちょっと洒落たものだ。

鏡が無くて閉口していた。いちいち洗面所に行くのも不便だ。その都度コンパクトを出していたが、もう限界だった。この鏡はなかなか変わったものだ。それをティッシュの箱にのせて、目

の前におくと本当にほっとした。便利この上ない。よかった、よかった。しかし、あとで、夫人が「言って下さればいいのに。沢山あるのに」ですって。人様にあれもこれも貸して下さいとはなかなか言えないものだ。でも、これは大いに気に入っている。

アンティークのお店も楽しかったが、4人でテーブルについていると、私はなんとも言えない幸福感が満ち溢れてきた。

帰ってお茶とコーヒーを入れ、私はお部屋で週刊朝日を読む。結構面白い。奥様は居間でブライトの曲を流していた。美しい曲が居間の方からかすかに流れてくるのを聞いている。爽やかな風が静かに吹き寄せる。大きなガラス戸を開け放して、あーなんという素晴らしい日々だろう。こんな幸せな日々を私は予想しただろうか。良いものを書くには良い気分でないといけないのだ。

12月30日

今日のはかねて憧れの喜望峰（Cape of good hope、岩倉具視使節団の書いたものが希望峰でなく喜望峰なので、以来それを踏襲）である。9時過ぎ3人で「シティロッジ」にタンザニアからいらした木村さんを迎えに行く。

タンザニアから遊びにいらした木村さんの言うには、タンザニアは治安がよいので、日本アフリカ学会は良く開かれるとのことである。120部族がいて、中心はフクマ族である。4分の1が国立公園で、世界遺産は6つあり、動物の種類は多い。アフリカ人は南米の殺したり殴ったりする映画が好きで、韓国大使が「冬のソナタ」を寄付してくれたが、しかし、人気がないので、夜の遅い時間に移されたそうだ。タンザニアの公用語はスワヒリ語であるが、中学校、高校、大学では英語教育が行われており、今は英語を話せる人は5%くらいとのこと。

ケープポイントに行く長い登山電車に乗り頂上まで行き、下に海を見る。右側は大西洋、左側はインド洋、なんと丁度その中間の右と左の色が違う。右側の色は青く澄んでいるのに、左側は濁っている。本当に驚いた。大海原があるところを境にして全く色が違うなんて考えられないことではないだろうか。間もなく降りて、今度は喜望峰に行く。

30分ほどで着く。喜望峰の絵葉書を探しても探しても見あたらない、「絵になりにくいからで



喜望峰

しょう」と山田氏。でも、行ってみるとそんなことはなかった。まるで東映の時代劇の映画の始まりのような寄せては返す浪は素晴らしかったし、海の正面の山はゴツゴツした岩の大きな大きな山だ。それなりに面白いところだ。ここが高校時代世界史で習った憧れの喜望峰なのかと思うと、感無量だった。

そのあと、こじんまりとした「ジャスト スシ」というお店に行って、美味しいお寿司を食べる。私の注文した「レディース」というのには赤ワインが付いていた。

それからスーパー（woolworth, pick'n pay）によって買い物をする。領事館にあったルイボステーをどっさり分けて頂いたが、少し小さいのも欲しかったので、このスーパーで買うが、値段が非常に違う（高い）のでびっくり。

12月31日

11時に近所の岡田邸に行く。岡田さんの仕事はイワシを分けてマグロの好きなイワシを売るのでそうだ。ここにマグロ船が寄港するので、そこに積み込むのだ。

白人の奥さんと娘さん3人、綺麗なお嬢さんばかり。でもかれは「バツイチで贅沢いえる身分じゃありませんから」ですって。要はだれでもお嫁さんが来てくれれば、有難いと思わなければならないと考えているのだ。「なんだかんだ言える身分ではないですから」には参った。でも、20歳も年下の奥様だそう。凹凸のある顔立ちの典型的な西洋人という感じの方で派手な化粧をしていたが、気配りのできる優しい方とのことだ。広々としたお家で、お寿司とお刺身がどっさりテーブルの上にあった（ケープタウンには、日本レストランは4、5軒ある）。庭ではバーベキューをしていた。2、30人のお客がいた。中田さんという背の高い奥様はご主人が大理石の輸入業者でイタリアに10年もいたけれど、子供の教育のこともあってこちらに来たそう。西洋人の学校に入れたら非常に良いとのこと、ちらほら黒人がいるが、あまり多いと世間に印象が良くないので、彼女らのような東洋人は最も歓迎されるそう。イギリスでは日本のように、ちょっと何かがあると父兄が学校に文句を言いに来るので、先生方もビビる傾向があるが、ここは悪いことをしたら、それなりに罰（例えばトイレ掃除とか）を与えたりするので良いと彼女は大いに満足していた。しかし、もう一人の30代らしい日本人は泥棒に入られて、お金、奥様の装身具、電化製品全てを盗まれたとのこと、その家にいるのが厭になってそこを出て、別のセキュリティの良いアパートに移ったそう。

テレビには紅白歌合戦が入っていて、丁度秋川雅史が「千の風になって」を歌っていた。

日本の若い女性がセキュリティの会社に勤めていて彼女らが欲しい本について話していた。海外で働く女性のために茶道のこと、外国人との付き合い方、使う英語などについて本を書いて欲しいと、私に言った。なるほど、実はそういうのが、外国で暮らす日本人は欲しいのだと知る。

1月1日

サバーテカルリーブでケープタウン大学にきていた京都精華大学のアフリカ文学研究者がお孫さん二人を連れて、遊びにいらした。なんと、その方は私が日本を出発前、見つけたアフリカ文学の本の著者の楠瀬教授であった。（ご主人は中部大学のスワヒリ語の教授）立派な学者でありながら、良い母親であり、優しいおばあちゃんであった。お正月には親戚一同が彼女の手料理を楽しむに集るそう。あまり人数が多くなったので、一家から一人と制限したという微笑ましい話であった。日本におけるアフリカ研究の中心は敬愛大学（千葉）だそう。

1月2日

午前中ワイナリーに行く。2ランド払って、胸にシールをはって試飲をする、リストの中から5種類を選ぶのだ。私はタカちゃんの分もと思って、2つ下さいと言って、1つを彼に渡すと、係りの女性がやってきて、未成年は駄目だという。21歳ですと言うと、失礼と言って離れていった。そして、ユアフレンドのためと言って1つ余計にくれた。その次からはふたつのグラスに入れてくれた。帰ろうとした時、彼女はグラスの入った袋を私にわたした。奥様がびっくりされていたが、私もなぜ私だけがグラスを頂けるのかよく分からない。タカちゃんを未成年と間違えたことへのお詫びのつもりかしら。いずれにしろ、そのグラスは今も私の食器棚の中に大人しくおさまっている。毎日使うと、きっとすぐ割ってしまうだろう。私も彼女を写した写真と共に感謝の手紙を送った。

そのあと銀行に行き、お金を交換しようとする、今の住所を聞かれ、奥様から手帳をおかりして、住所のページを開けてガラス窓にくっつけて事務員に見せた。

1月4日

午前8時パパの車で（いつの間にか私まで領事をパパとかお父さんと呼ぶようになってしまった）、ウォーターフロントへ行く。私がお金を交換しすぎたので、お礼方々回転寿司を皆さんにご馳走しようということになった。私は簡単に考えて、奥様の運転で行けるものと思っていたが、彼女はあまり運転に自信が無く、ウォーターフロントは繁華街なので、パパが朝出勤する時、その車で一緒に連れていってもらふことにする。やはりお立場上何か起きたら大変なので、すべてに非常に慎重である。それでいいと私も思う。何かが起こってからでは遅いのである。

我々は買物をしたりして、12時近くになるや、早々に中に入る。中国人が経営しているらしい。握っているのは無論中国人である。サンドイッチと見まごうばかりのお寿司に辟易したが、食べてみるとこれが意外に美味しいのにびっくり。茹でたエビ、マグロ、カッパ、鉄火、最後にエビの天ぷら、そして中国のお菓子まで出た。

毎朝、日本人が喫茶店でコーヒーを飲むように、金髪の男性がお寿司を食べながら新聞を読んでいる姿を見て、感無量であった。彼は毎日遅い朝食をとりここへ来るのだろう。

奥様はグラスワインなどここにはないと思っていらしたようだが、メニューにちゃとあって（アフリカでは珍しいことようだ）、大きなグラスで出てきた。とても私一人では飲めない、タカちゃんに手伝ってもらった。最初は躊躇していたらしいタカちゃんはやがて赤ワインとお寿司のコンビネーションに魅了されたらしい。

間もなく我々はスーパーで落ち合い、ご主人は我々を自宅に届けてくれ、軽いランチをとってから、また、会社に戻られた。

丁度、暮れのことだった。我々が車で移動中、携帯に電話が入って、「日本の孫が亡くなったので、1月3、4日に日本に行きたいので、ビザが欲しい」ということであった。

山田氏にとって一番厭な仕事は、事故などで亡くなった人のことを家族に連絡する時と空港に迎えに行く時だそうだ。でも「ウチのパパはその人の身になって、一緒に泣くので感謝され、“忘れられない国になりました”とお手紙を戴きます」との夫人のお言葉。そうでしょうとも、そうでしょうとも…。

これまで色々な国に住んでみて、彼らにとってはカナダが一番良かったとのこと（ニュージーランド気違いとしては少し複雑な気持!）。

ニュージーランドはすべてにこじんまりとしているが、カナダは自然が雄大で、美しく、少々寒い時もあったが、家は集中暖房で暖かく、町は冬を快適に過ごすために見事に整備されている。女性、特に若い女性は可憐で可愛らしかったようだ。

1月5日

今夜は夕食後、外務省のいろいろな話に花が咲いた。

かつての外交官試験は無くなり、上級公務員試験になってしまった。同じ試験を受けて受かったあと、外務省、農水産省、文科省と希望を出して、分かれるのだ。かつてはいろいろな大学から合格したが、今は法律にウエイトをおいているので、東大法学部が半分を占めるようになったとのこと。そして中級試験は専門職員として語学に重点をおいたものになって、試験の半分は語学の問題が占めている。最近では中級から大使になる人も出てきた(3割位)。以前は中級から大使になる人はほとんどいなかったが、最近では上級国家公務員試験を受けるよう勧めることもあるとのことだ。東大などトップの学生(上位5名くらい)の名前はわかるので、先輩や知人などに頼んで、受験するよう勧めるそうだ。そういう場合はまず本番でへんな成績を取ることは有り得ないとのこと。大体合格圏内になっているそうだ。

毎食後、特に夕食の後は色々な話に花が咲き、時にはお話がご馳走以上のご馳走であることもあった。

帰りの空港でいかにもこの国らしいハプニングがあった。カウンター的女性は私のチケットを見てこの切符は駄目だとか言ったらしい。山田氏も私達も青くなった。すったもんだの挙句、領事館に電話すると、係りの青年(九州大学を1年休学して研修にきている)の指示ですぐ隣の国際線のカウンターに行くとなちまちOKであった。係りの女性是国内線のチケットしか知らないのだろう。あきれ返って声も出なかった。あのまま飛行機に乗れなかったら、どうなっただろう。最近では外務省もインターンシップの学生を受け入れているのだ。夫人が褒めるように実に爽やか



マンデラ元大統領の函閉されたロベン島



マンデラ元大統領が投獄されていた部屋

な青年だった。

こうして、私の初めてのアフリカの旅はつつがなく終わり、7日の深夜無事帰郷した。山田夫妻をはじめとして、沢山の人々のご親切、ご好意をいただいて、素晴らしい旅となり、まさに忘れられない年末年始になった。